

はしれ！ はしれ

木曜日の放課後。クラブ活動のない日の家庭科室は、がらんとしてとても静か。——な、はずなのだけど。

とびらのすき間から覗き込んだら、西日でうつすら赤くなってる家庭科室に、ひとつ動いてる影があった。わたしは、音がしないようにとびらを開けて、そおつと、近づいてみる。

気づかれないように、そおつと、そおつと近づくとつれて、影に色がついてきた。制服の背中で結んだエプロンのすそが、左右にひらひら動いてるわ。

それといっしょにカチャカチャ、ってボールをかき混ぜる音。ふふ、全然まわり見えてないみたい。もうちょっと、いけるかしら？

息をゆっくりにして、わたしはもちよつと近寄った。

あと少しで、栗色の髪にふれるくらい。そろそろいいかな？ じゃ、せえ、のあ

「なに作ってるの？」

「ひ、ひいっつっ!!」

あらら。ぴよん、と飛び跳ねて、後ろの流しにハマっちゃったわ。

やあだ。そこまで驚くことないんじゃない？

「だ、だ、だっ、誰っつ!! っ、ほのかあ!？」

わたしが、ただにっこり笑っていたら、栗色の髪がぶんぶん振り回された。

「ちよ、ちよつと！ なんてほのかが っ、てゆるか、どうしてわかったのよ!？」

わたしは吹き出すの我慢しながら、一枚の「ピー」を目の前にかざした。はつきり書いてあったりするのよね。『使用時間3時〜5時 美墨なぎさ』って。

「家庭科室の利用届けは、生徒会にも「ピー」が回ってくるの。知らなかった？」

ふふふ、頭がかえちゃってるわ。それじゃ、聞かせ

てもらいましょ♡

「みんなにないしよ、なに作ってるのかな? なぎさ?」

「クッキー?」

誰にもないしよで作っていたもの。その正体を聞いて、わたしはつい声が裏返っちゃった。

ただのクッキー焼くの、わざわざ家庭科室使って? わたしや志穂ちゃんたちにもないしよ?

「いやあ ほら、ここんとこあつちが忙しかつたじゃない?」

あつちつて うん。まあね。

「それでさ、たまには普通に中学生しようかな、って思っただけなんだよ」

話してる間、わたしの目は見てくれないのね。でも、その泳いだ目ではつきりわかったわ。

なるほど。

スポーツの秋。盛んなのは、なぎさのラクロスだけじゃない。もちろん、サッカーだって試合がいっぱい。他校と試合すれば、当然 ね。

わたしは、グラウンドの方に目をやった。男子部のグラウンドは、周りに人垣が出来てる。色も形もとりどりの制服を着た、女の子たち。

「負けてられないものね♡」

「え? あ!」

とたんに、なぎさの顔が真っ赤になってく。ふふ、図星でしょ?

「いや、そのね ええと だああっ!」

あ、ちよつと、意地悪だったかしら?

「それで、どんなクッキー作るの? やっぱり、ハイ型?」

「えつと だから、そんな あたしはさ!」

うふふ、なにあってるの。そんなのじゃ、負けちゃうわよ?

「　　どんなのが、いいのかな？」

ささやくくらいに小さな声。わたしはちよつとだけ吹いちゃった。こういうときってやっぱり、周りが見えなくなっちゃうものなのね。

「そんなの、簡単よ。なぎさはどう？　練習が終わって、ちよつと何か口に入りたいとき、目の前になにがあればうれしいの？」

相手だって特別な人、ってわけじゃないんだもの。まずは、自分がほしい物を作るのが基本よね。

「ああ、そっか　　そうだなあ、
まして、同じ運動部なんだから。」

「あんまり乾いたのは、ちよつとダメ　　」
なぎさが言い終わる前に、わたしは、お菓子の本をぱつと見せた。開いてるのは、ソフトクッキーのページ。

「それじゃ、はじめましょ　　」

30分後。わたしの目の前には、クッキーが並んでた。しっとりした、ソフトクッキー。ちよつとコゲちゃってるところもあるけど、なぎさの力だけで作った、なぎさのクッキー。

その前で、なぎさがじつとクッキー見つめてる。

「大丈夫よ。藤村くん、差し入れもらいなれてるから」
フロアになってないような気がして、思わず口を手でふさいじやっただけど、なぎさは気が付かなかつたみたい。まだ、じつとクッキー見てるわ。

「食べてくれるかな？」
「うん」

わたしは思いっきりうなずいた。このクッキー見て、伝わらない人じゃないもの。

「喜んでくれる　　かな？」

ちよつとだけ上目遣いで、なぎさがわたしを見た。

「それは、なぎさのがんばり次第よ」

つい、うなずきそうになったけど、なんとか耐えたわ。これだけは、わたしが言っちゃいけないことだものね。

「よあつしー!」

パン、って大きな音。なぎさが両手で頬を叩いたんだわ。うん、そつでなくちゃ

エプロンをそつと脱いで あら、背中で引つかかっている?

「ん? ああ。このエプロン、ひもが短くてさ。しょうがないから、安全ピンで留めといたんだけどよし、とれたとれた。

それじゃ、ちよつと行って「よっか」

「うん」

言いながら、わたしはその姿を見守った。

紙ナプキンで包んだクッキーとスポーツドリンク、小さなポシェットにまとめて入れて、手首にちよん、つて下げて。

持っていくのは、わたしの自慢の友だち。制服姿

にピンク色のワンポイントがかわいい。グラウンドの、どの女の子にも負けてないよ、なぎさ♡

——え? ちよつと待って。『ピンク色』!?

家庭科室のとびらを閉めようとしているなぎさの後姿を見て、わたしは思わずくらつ、とした。あのまんまで男子部に、なんて!?

「痛っ!」

思わずとびらにぶつかりながら開けようとしたら、指が取っ手にはじかれた。開かない?

「戻ったら開けるからさ、ごめん、ほのか」

ああつ! 外でつつかえ棒してるのね。もあつ、

こんなときにいつ!

「待って、なぎさっ!」

「待って、なぎさっ!」

ほのかの大声が、背中から聞こえる。

手近にあつたホウキで、とびら閉めちやつたもんね。ちよつと、かわいそつだつたかな？

でも、今回だけは別。ほのか、ホントごめん。あとで埋め合わせはするから

ガタン、ガタガタガタツ！

な、なに、この音？

家庭科室のとなりの教室から聞こえてきた音が、いきなり消えた。しん、とした廊下つて、かえつて怖いよ。まさか、ドックゾーンの？

じつと耳を澄ませてたら、教室のとびらがガラツと開いた。

「こら！ なぎさっ！！」

ほのかあ！？ なんで？ 家庭科室はとなりののに？？

「窓からだつて移動はできるわ——いや、それどころじゃないのよ。あ、なぎさ！？」

ひええ！ さつさと行かなきゃ！！

だーっ、と走つて校舎出た。やつぱり、あたしの方がほのかより足速いもんね。

ほのかには悪いけど、今日はひとりで行きたいんだよ。せつかく作ったクッキーなんだから。ほのかの友だちじゃなしに受け取つて欲し——

ああっ！ だめだ、顔が熱くなつちゃうよ。もう、想像だけで恥ずかしくなつてどうすんの、なぎさ！ これからホントに渡しに行くつていつのに

「見つけたわ、なぎさっ！！」

わっ！ っつて、渡り廊下の上か。よし、これなら逃げられ

「動かないでよ。せえ、のっ！」

ぱつ、と窓枠に足かけて、片手でスカート押さえつて うわあ、お、落ちてきたっ！！

「痛たた ちよつと、待つてなぎさっ」

あ、ありえないっ！ 変身してないほのかが、こ

こまでやるなんて。 だめだ、まっすぐ下駄箱に行っただんじや捕まっちゃうー!

「おーい、なぎさあ〜」

「なにになになに? なんで走ってるの?」

ほのか引き離そうと思って体育館の方回ってたら、志穂たちがのんびり歩いてた。

「しらないっ! 後ろのほのかに聞いてえ〜っ!!」

もう、構ってられないもんね。それに、ふたりにほのかの足止めしてもらえば、って、なに?

「なあぎさあああっ! こらまでええっ!!」

ひえあ!! 志穂たちまで追いかけてきた!?

ヤバ! あのふたり、絶対どこ行くのか問い詰めてる—— あーっ! だめじゃん! これじゃほのかよりた、悪いよあっ!!

「あたしがいつたい、何やったっていうのっ!!!」

「校舎戻っちゃったねえ」

志穂ちゃんが息ととのえながら言った。

「学校の中だと、足の速さだけじゃ追いつけないもんね。う〜ん、ね、どこ行ったかって、わかんない?」

莉奈ちゃんに言われて、わたしはちよつと考えた。

普通の方法じゃ、なぎさの居場所なんてわかるわけないわ。せめてマップルを連れていけば、マップルがわかるのだけど、ん? あ、そうだわ!

「なに、これ?」

わたしが取り出したものを見て、ふたりともきよとん、としてた。

「なぎさ検知器」

「へ?」

それはそうよね。普通考えられないもの。でもね、

「性能は保証つきよ♡」

実験なら、いままで何度もやってきているものね。

「へえ どういう原理なの？」

「ん〜 わたしの、カン、かな？」

「ふ〜ん」

これで納得されちゃうっていつのも、ちょっと悲しいわ。わたしって、そんなにマッドに見えるのかしら？

「はあ、はあ ふう」

三階の空き教室は、内側からカギがかかる。たまーにだけ遊びに使うから知ってるんだ。

あたしは、とびらにカギをかけて、壁によりかかった。ここまで逃げれば、もう大丈夫だよ。あとは、ほのかたちが諦めるのを待って、そおっと下駄箱に向かえば

『ホントに、ここ？』

『ええ。それじゃ』

あれ？ 足元で聞いたような気がするよ。そういえばこつて、理科室の上だったような でも、まさかね。あたしがここにいるなんて、わかるわけない――

ボタンッ！

「なぎさっ!!」

大きな音と一緒に、床が持ち上がった。そこから出てきたのは、ほのかの頭。

て、天井突き破ったつてのお!?

「待ちなさいってば、ちよつと!」

冗談! 待ってられないよ。先輩が帰っちゃう前に、あたしは男子部に行くんだからっつ!!

「止まれ止まれ止まれえ〜っ!?!」

うわっ、ほのかに続いて、志穂も上がってきてる。

「止まったら捕まえるんじゃないの？」

「あたり前よ!!」

ひゃあ、莉奈も？

なに？なに？何があつたつていつのよあつ！

「ちえ〜。また捕まえそこねちゃった」

あたしがそう言ったら、ほのかちゃんが肩をぼん、つてたいてくれた。

「大丈夫よ、志穂ちゃん。これがあれば、どこにいたつて絶対見つけられるわ」

おお。ほのかちゃんが燃えている。珍しいなあ。

「でもさ、見つけてどうするんだっけ？」

莉奈の言葉を聞いて、ほのかちゃんが両手のこぶし握つた。

「取り押さえるのよ！あのまま外に出たりしたら大変じゃない」

莉奈、あ、そっか、つて顔してる。でもでも、なんか変だよ。うん。そりゃ今のままで男子に見つかったりしたら大変だけど

「でもでもでも！走つてたら、そのうち気が付かない？」

言つたとたん、ふたりの顔がくるつとこつち向いた。

「なぎさは絶対気が付かないつ!!」

ありや。ふたりして八モつちやつてるよ。まったく、なぎさも信用があるんだかないんだか

「ふうっ」

図書室の中はしん、としてた。人はいるけど、おしゃべりするようなのはいないもんね。ちよつと、一息つこつか。

テーブルは目立つといけなから、奥の書棚にもたれて。あたしはまたため息ついた。

「それにしても、ほのかってば」

こんなに怒るなんて思ってたなあ。藤P先輩にあげるのはバレちゃってるだろうし、いっしょに行きたいのだからわからないわけじゃないけどさ

キシ、キシ

恋愛関係になると、ほのかでもヤジ馬になっちゃうのかあ。しかたないのかもしれないけど、ちょっと悲しいな

キシ、キシキシ

それとも、まさかほのかも藤P先輩のこと？ どうしよう。もしそうなら、あたしに勝ち目なんか

キシキシキシ

って、なによ、さっきからこの音 うあっ！

いきなり、もたれてた本棚がなくなつた。なんとかバランスとつたけど、見たらぼっかり穴が開いている。

「いたいた、いたよあっ！」

志穂の声？ ヤバっ！

あたしはこぼれた本をよけながら、なんとかとびらまでたどり着いた。振り返ったら、図書室中パニック状態。さっき開いた穴から、ほのかたちがせり上がってきてるし、ありえないっ！

「ほのか！ 化学部は学校を秘密基地にでもするつもりっ!？」

「だいじょうぶ！ これは、わたしの趣味っ！」

それじゃなお悪いって！ あ、でも、これだつて、あたしの場所がわかんないやどうしようもないのよね。さっきつから、いったいどうやって、あたしの場所を？

そう思いながら、校舎つらのほうへ曲がろうとしたら、後ろから声が聞こえた。

「ポポ　なぎさ、右曲がるポポ」

ポルの声？　ああ、ポルの予知能力!？

え、い、だったらもう靴なんていい！ 上履きのま

んまで男子部行ってやるっ!!

「なぎさだめっ! そっち行っちゃだめえっ!!」

なんなのよ、いったい

ほのかの声を無視して校舎つらから表に出ようとしたら、柵の向こう、男子部に誰か立ってた。

「あれ? 美墨さん、ランニング?」

え? こ、この声!?

「制服でランニングかあ。さては、ユニフォーム忘れたな? はは、俺もむかし、やったことあるよ」

足を止めて顔を上げたら、知ってる顔があった。ふ、

藤P先輩っ!

「え あ、その」

ひい。いざとなると、声が出ないよ。どうしよう、グラウンドに行く前に会うなんて思ってたないから、心の準備が

あれ? 藤P先輩、なんだか顔が赤い? あたしから目をそらして横向いちゃってるし あ、あたしの差し入れ、気付いちゃったとか?

なんだか、余裕が出てきちゃった。うん、いいや。あたしのはあたしのなんだから。

「藤P先輩、あの、これ」

「なぎさあーっ!!」

あっちゃあ、ほのかの声だ。追いつかれちゃった。

「あ、藤村くん あ!!」

ほのか、あたしの後ろにびったり貼りついた。

「見てないわね?」

え? なにが?

振り向こうとしたら、ほのかの手があたしの顔を前に向けた。あたしに言ったんじゃ、ないの?

「え?」

藤P先輩、困った顔してる。

「いいから! 見てない、でしょ?」

「え!? あ、ああ。そっ、そうだね。俺は、なにも見

てないよ。うん」

なに？なに？なんなの??

「差し入れはもう渡したのね。じゃちょっと、なぎさ、こっち」

藤P先輩から離れた瞬間、腰にほのかの手が回った。ばさっ、って音とっしょに、なんか腰が暖かくなって??

「いい、落ち着いて聞いてね」

ものすごく真剣な顔だよ。なに言われるんだろ。

「なぎさ、スカートめくれたの。思いっきり」

え？ええっ!?

「エプロンのひもが短いからって、安全ピンで留めてたでしょ？外したときに、間違っつてスカート留めちゃってたのよ。気付かなかった？」

あ、そつえば、そんな気も　っていつか、っていつかつ!!

「なんで言わないのよっ!」

「なぎさが逃げるからでしょ!?! 遠くから叫ぶわけ

にいけないじゃない。『スカートめくれてるっ!』なんて」

あ、それじゃ、藤P先輩が赤くなつてたの　!

「うわ、うわっ、うわあゝっ!!」

ど、どど、どーしょー! ああ、もう顔なんか会わせられない。クッキーだつてもう　っ!!

「落ち着いてよく見て。藤村くん、なにしてる？」

見て、つたつて　あれ? あたしのクッキー、食べてる。おいしそつに、食べてる!!

「藤村くんが、見てない、つて言えば、見てないの。

安心した?」

そつか。だから藤P先輩に食つてかかつたんだ。ありがと、ほのか。親友でよかつたよ。

「わたしはずつと見てたけど、ね♡」

いまの言葉、聞かなかつたことにしよ。親友でいるために。うん。

—おしまい—